

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 心 理 学 ）	氏名	田中 光
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目 アドホックカテゴリーにおける虚記憶の検討			
論文審査担当者 主 査 教授 中條 和光 審査委員 教授 宮谷 真人 審査委員 教授 湯澤 正通			
〔論文審査の要旨〕 本論文は、アドホックカテゴリーの事例で構成された名詞リストを記憶することによって、その後の記憶テストにおいてリストに含まれていなかった事例に対する虚再認が生起することの検証及び、虚再認の生起メカニズムを明らかにすることを目的として行われた研究に基づくものである。アドホックカテゴリーは、Barsalou (1983, 1991)で提唱されたもので、問題解決の過程において文脈に応じて一時的に構成されるカテゴリーのことである。通常の共通属性を持つ事物の集まりである分類学的なカテゴリー（コモンカテゴリー）と異なり、問題解決の場面で、特定の目標を達成するために複数のコモンカテゴリーの事例を一時的に集めて構成されるものである。これまでにコモンカテゴリーの表象構造は事例リストの記憶によって生じる虚記憶という現象を利用して調べられてきた。本論文では、同様の手法を用いてアドホックカテゴリーにおける虚記憶の生起の有無と虚記憶の生起メカニズムを明らかにし、またそれらを通して表象の構造や形成過程を調べている。 本論文は以下のように構成されている。 第1章「本研究の背景と目的」では、実験室的な虚記憶研究の方法として、Deese-Roediger-McDermott パラダイム（以下、DRM パラダイム）(Roediger & McDermott, 1995)を用いること、また、同パラダイムによってこれまでに検討されてきた虚記憶生起メカニズムの理論ではアドホックカテゴリーにおける虚記憶生起を十分に説明できないことを述べている。その上で、DRM パラダイムを用いてアドホックカテゴリーの事例リストにおける虚記憶生起を報告した先行研究 (Soro, Ferreira, Semin, Mata, & Carneiro, 2017) の結果の再現性の検証と、同パラダイムにおける虚記憶の生起メカニズムの検討（研究1）、及び本論文で提唱する虚記憶生起メカニズムのモデルの検証（研究2）を目的とすることを述べている。 第2章「アドホックカテゴリーとコモンカテゴリーにおける虚記憶生起の比較（研究1）」では、DRMパラダイムにおける虚記憶の生起やそのメカニズムが十分に検証されているコモンカテゴリーの事例リストの場合との比較によって、アドホックカテゴリーにおける虚記憶の生起の検証、及びその生起メカニズムを調べている。研究1では、Soroら（2017）が見出した虚記憶生起の再現性が確かめられた。また、Soroら（2017）では、検証が不十分			

であった学習時のリストのテーマへの気づき（リスト項目が特定の問題解決の文脈に沿って集められた項目であることなどへの気づき）による虚記憶生起の促進が確かめられ、カテゴリーの表象形成と虚再認の生起メカニズムのモデルが提唱された。

第3章「アドホックカテゴリーと連想リストにおける虚記憶生起の比較（研究2）」では、特定の名詞からの連想語で構成された、いわゆる連想リストとの比較によって研究1で提唱したアドホックカテゴリーの表象形成と虚記憶生起メカニズムのモデルを検証している。連想リストでは、DRMパラダイムにおいて、学習時には呈示されない連想元となった名詞に対して気づきを伴うことなく高い確信度で虚再認が生じる。逆にリストのテーマへの気づきが生じると虚再認は生じ難いとされる。そこでアドホックカテゴリーの事例リストにおいて、リスト作成時に想定されたリストのテーマに含まれる名詞概念に対して虚再認が生じるかどうか調べられた。その結果、アドホックカテゴリーでは、テーマに含まれる名詞概念に対する虚記憶が生じ難いことが確認された。この結果より、アドホックカテゴリーでは事例リストの学習中にテーマへの気づきが生じ、それによってカテゴリーの表象が形成されていることが確認され、研究1で提唱したモデルの妥当性が検証されたとしている。

第4章「総合考察」では、本論文における知見のまとめと考察が行われている。アドホックカテゴリーの心内表象の構造と形成について、問題解決に関わるスキーマと各項目とが1対多の関係で対連合した構造であること、リスト学習中にリストのテーマへの気づきが生じ、意識的にテーマによって項目を統合することで表象が構成されることが明らかとなったとしている。また、虚記憶生起の原因が、記憶テストにおいて、再認項目が形成されたアドホックカテゴリーの事例であるかどうかを判断の拠り所とすることで生じる意味的混乱エラーであることを明らかにしたとしている。これらが本論文の主要な知見であるとされ、思考研究やカテゴリー研究、虚記憶研究における本研究の知見の位置づけなどが考察されている。

本論文は、次の3点で高く評価できる。

1. Soro ら(2017) のアドホックカテゴリーの事例リストの学習においても虚再認が生じるという結果の再現性を検証したことに加え、先行研究では十分に検証されていなかった虚再認の生起メカニズムを明らかにしたこと。
2. DRM パラダイムにおける虚再認の生起メカニズムを明らかにすることを通して、アドホックカテゴリーの心内表象の構造やその形成過程を明らかにしたこと。
3. 意味記憶として無意識の世界に静的に保持されている知識が、問題解決の過程においてアドホックカテゴリーとして意識上で動的に利用されるという心の働きを実証的に研究し、心理学における問題解決過程の研究に重要な知見を加えたこと。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和2年2月14日